教授の『職場の健康づくり』研究室

第49回 ワークライフバランス今昔

▼若い世代の思い

来年から一緒に働くことになる若い研修医と話をした。彼は、仕事は忙しくても一向にかまわないが、家庭を大事にしたいので、なるべく家族と一緒にいる時間をとれる環境がのぞましいとのこと。向上心がありハードワークする彼の姿と、上記の言葉がうまく合致せず、私はしばらくぼんやりしていた。私が医師になった30年近く前、早朝から夜遅くまで残業するのは当たり前で、仕事とはそういうものだと教えられた。いま考えるとブラック企業そのものだが、当時は何の疑問も持たなかった。当然ながら、家庭は二の次となり、子どもの病気や冠婚葬祭など、のっぴきならない状況でしか協力しなかった。だから、彼のように「仕事も大事だけど、家庭はもっと大事です」と真正面からいわれると愕然とする。仕事をきちんと終えて家に帰り、子どもを風呂に入れて、当直以外は家族と過ごす時間を大切にする、それを当然のことと考えている。残業することが立派だなんて、みじんも考えてない。やれやれ、私の考え方はもう時代遅れなのだろうか。

▼働くことの意味

働くことには、まずは生計をたて経済的に自立するという意味がある。できれば、やりがいのある仕事に携わりたいと思う。いっぽうで、いま非正規雇用が増えている。企業にとっては使い勝手のよい非正規雇用だが、その収入を含めて労働条件はとても厳しい。とくに若い世代の非正規雇用が増え、結婚し子どもを育てるという当たり前の人生設計ができないほどに、経済的に厳しいものがある。たとえ正規雇用となっても、「君の替わりはいくらでもいる」というプレッシャーのもとで、きびしい競争や激務にさらされ、身体をこわす人も多い。本人が望まなくても、残業をやらざるをえない事情もあるのだ。

▼トルストイ「戦争と平和」から

「戦争と平和」は19世紀初頭のナポレオンのロシア戦役のもと、貴族階級の混乱と没落を描いた小説だ。登場人物のひとりナターシャは生命力にあふれたロストフ家の美しい娘。社交界デビューと醜聞、モスクワ脱出、元婚約者の死、そして敬愛する伯爵と結ばれ4人の子をもうける。結婚後のナターシャの姿をトルストイは次のように語る。「ナターシャがすっかり没頭した対象は、家庭であった、、心の力のありたけをこの夫と家庭に尽くすことに向けたので、彼女は条件が別だったらどうなるかということを、想像できなかったし、そういう想像にすこしの興味も抱かなかった。」　働くことと家庭の関係について考えさせられる場面だ。家族のために尽くすことは、前近代的で古くさいことなのだろうか。私には、過酷な運命を生きたからこそ家庭（平和）を大切に思うナターシャの気持ちが、少しわかるような気がする。こう書くと、「男にとって都合のいい女性をひきあいに出して」と批判されかねない。もちろん、経済的余裕がある貴族の妻ナターシャと、現代の勤労者世帯の事情はまったくちがう。収入とやりがいを求め、女性が外で仕事をする。男性は家事と子育てに協力するのが当たり前の現代、19世紀よりも格段に進歩した公平な社会になったことは間違いない。私のような旧世代の人間は、若い人たちの働き方や家庭の新しいあり様を、とりあえず、ただ静かに眺めているのみである。

鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授
谷口　晋一
（たにぐち　しんいち）